

先輩に学ぶ「出会いをプロデュース」

～能勢高校生、西中学校生との出会いから～

能勢町立久佐々小学校6年生

〔1〕中学生の職場体験から ～「出会いをプロデュース」開始！～

今年度、6年生の総合学習は「出会いをプロデュース」をテーマにとりくんだ。昨年度、職場体験に来た西中学校の生徒との出会いをきっかけに、子どもたちが成長した様子からヒントを得た。子どもたちに、懸命に生きている人たちの姿を見せ、今の自分を見つめ直し、将来への展望を持つことをめざし、年間12回程度の出会いを計画した。学習を主体的なものにするため、全員がいずれかの出会いで実行委員をし、出会いを「プロデュース」する役割を担う事とした。今回は高校生・中学生との出会いを紹介する。

〔2〕近未来の自分をイメージする ～高校生との出会い～

高校生との出会いは、自分が卒業までにながらぶことやできることを見つけ、卒業後の生活に展望を持つことと、先輩に対して礼儀正しく接し、自分の意見を返すことを目指して設定した。能勢高校には快く協力していただき、能勢高校3年生7名と久佐々小6年生68名との出会いが実現した。

〔3〕主体的な学びをめざして ～打ち合わせ・アンケート・コース選択～

事前にこの学習に協力してくれることとなった高校生7名と小学生実行委員8名が打ち合わせをした。高校生の得意分野と小学生の興味・関心のあることを出し合い、野球、卓球、マンガ、ダンス、テニス、農業・環境の7コースの学習を組み、それぞれの担当を決めた。農業、環境コースは小学生の希望をとりいれていただき、能勢高校農場の見学と体験となった。その後、小学生全員にアンケートをとり、メンバーを決定した。コースを自分で選ぶことで、好きなものを探す意欲や、主体的に学習にとりくむ姿勢が生まれた。



〔4〕実施計画

日時：12月17日（木） 午後1：45～3：20

形態：①コースごとに高校生から話を聞く。

（がんばっているクラブ・学習・活動・将来の夢・
小学校生活へのアドバイスなど）

②小学生から意見を返す。

③いっしょに活動し、交流を深める。

（野球ゲーム・声優発表会・ダンス交流など）

④お礼・あいさつ



〔5〕先輩に学ぶ ～子どもの感想より～

・（野球コース）

ぼくたちは、今、西能勢野球クラブをがんばっていて、Aさんは、小学生まで西能勢少年野球クラブでがんばっていたと聞いて、「先輩やなあ」と思った。Aさんはピッチャーをやっていて、球がものすごく速かった。

・（卓球コース）

Bさんのお父さんは、すぐ近くの田んぼをしているそうです。将来Bさんはお父さんのあとを継ぐそうです。それを聞いて私は「うおー、えらいなあ。」と思いました。

中学のクラブでは、卓球に入ろうと思います。

・（まんがコース）

マンガのキャラクターになりきって、能勢高校の先生方に発表しました。いざやってみたらはずかしくて、すごくきんちょうしました。Cさんは堂々と言っていかっよかったです。

何かを発表したりする時は、はずかしさをすててやるということ。友達にはついて行かず、自分の行きたいクラブとかに入るということ。この2つを私はCさんに学びました。

・（ダンスコース）

Dさんに踊ってもらおうと、すごく上手で、レベルの高いダンスだなあとと思いました。そのダンスを教えてもらっても同じようにおどれないし、動けなかったです。曲も速いし、ふりも難しいのに、上手ですごいなあと思いました。

Dさんはダンスのバックダンサーをやりたいけどあきらめたと言っていました。それでもダンスが好きなので、大学に行っても大人になってもダンスがしたいと言っていました。私もダンスが好きなので、いつまでもダンスをやりたいと思いました。

〔6〕少し先・少し前の自分を見つめる ～子ども同士で学びあう可能性の発見～

①近い将来のモデルから自分を見つめなおす

小学生が、今の自分から想像できる近い将来の高校生の姿を見ることで、新しい生き方を見出したり、中学・高校に希望を持つことができた。高校生が小学生の前できちんと活動することや、自分の生き方や主張を語ることを、小学生は「かっこいい」と感じ、小学校の中では最高学年である自分たちの小学校での姿を見直すきっかけともなった。また高校生自身も小学生の姿からひたむきさや素直さを認め、ほめてくれた。互いに感謝の気持ちを持って学習を終えることとなった。

②大人の目線からだけでなく子ども同士の学びを

毎年、中学生が小学校に職場体験に来る。今年は2名、昨年度は1名が担当となり、この学年に関わってくれた。小学生が、中学生が母校でがんばっている姿を見ることも、中学校であんなふうになりたいというモデルになっている。1週間の実習の最後には、中学生に小学生にクラブのことや中学校生活についてアドバイスする授業をくんだ。小学生は中学生の話を食べるように聞き、よく質問していた。中学生は六年生の不安や希望を、自分が経験したことだけによくみ取ってくれて、すぐに中学校生活に生きるアドバイスをしてくれた。中学生も、授業や職場体験の中では、「先生のたまご」としての立場を自覚し、ふだんは見せない真剣な姿勢を見せてくれた。大人の目線からだけでなく、子ども同士で学びあうことで互いが素晴らしい成長を生むことを実感したとくみとなった。